

## 「藤原道長と競馬、そして尾駮の駒」

国際日本文化研究センター 教授 倉本 一 宏

### 1. はじめに

改めまして、倉本と申します。本日はようこそお出で頂きました。また、お招きを頂きまして有難うございます。

先ほどご紹介がございましたが、『御堂関白記』が世界記憶遺産に登録されて以来、割と忙しく、あちこちから『御堂関白記』の話しをしに来いということで、これまで鼻も引っ掛けてくれなかった人達が来い来いということで、来週はパリまで行ってきます。11月はハノイ、12月はホーチミンとあちこち行きます。

また、ご紹介では私の肩書は日文研の教授ということを書いて下さいましたが、実質教授の仕事はほとんど出来てませんで、研究調整主幹という執行部に入られております。割と大きな組織なのですが、その中で研究と国際関係のすべての苦情が全部一人に集まってくるということで、毎日50通くらいのメールを全部処理して返さなければならないということで、非常に忙しい日々であります。

本当は、このような講演を国内で引き受けるということは滅多に無いのですが、この会の会長であります相内さんが京都に来て下さいまして、私が喋っている会に聞きに来られて、その後先斗町へ飲みに行って、その話しの合間から彼の熱意がひしひしと伝わってきて、これは何がなんでも行かなければならないということでお受けしたという次第であります。ということで、ここに立たせて頂いております。

というのは、表向きの理由でありまして、実は大分前から青森で仕事がないかと思っていて、中学生位の頃から山の中にあります蕨温泉に行きたいなとずっと思っていました。青森に来たのはこれで4回目なんですけど、日程が取れなくてなかなか温泉に入れなくて、今回その目的を達成するためには前日、青森に来れば遊びに行けるのではないかと思い、昨日蕨温泉へ行ってきました。これで大体初期の目的はすでに達成したのですが、これをやるという約束で来ましたのでやらせて頂きます。

因みに、前回青森に参りましたのは、恐山に登って、学生たちと来まして、大祭をやっていて、イタコさんが居て、死者を呼び出してくれるというので、皆それぞれに勝手に好きな人を呼び出してもらおうという企画をしまして、私は清少納言でしたが、ナポレオンとかという人もいて…。ところが、実際聞いて見ると、そういうのではないのではないか？ということをおもいましたので、温泉に入って、まじめに帰って来たという次第であります。

さて、相内会長さんの依頼は、「尾駮の駒、牧と六ヶ所村が関係があることを、古記録を使っ

て実証できないか？」ということであったと理解しましたが、京都でも申し上げたのですが、「それは無理です」とお答えしました。無理なら来なくてもいいと言ってくれると思っていたところ、“それでも話しをしに来い”ということでした。

先週の火曜日に、東京に『文藝春秋』という雑誌がありますが、そこで小説家が2人と歴史家2人が対談をしました。「歴史の喜び・歴史の苦しみ」というテーマで座談会をしました。因みに、来月10日に発売になる『文藝春秋』という雑誌に載りますので、よろしければお買い求め下さい。作家の方は半藤一利さんと中村彰彦さん、歴史家は小和田哲男さんと私。

その中で、作家というのは迷ったときには“必ず面白い方、面白いことを書くんだ”と。それに対し歴史家の2人は、迷ったときは“必ず正しい方、正しいと思う方を書く”ということで、小和田さんは割と大胆に書く方なんですけど、私は割と慎重ですので9割位本当だなあとと思うことしか書かない。8割位では書かない。2割位怪しいときは書かないことにしている…。

これは僕らの歴史学科の伝統なんですけど、学問というのは歴史に限らず「わかる」と「わからない」を分けることだと先生方や先輩方から教えられて来ましたから、そのようにしている…。分けるということがわかることである。ここから先はわからない。わかるのがここまでで、この境界を明らかにして、その境界を段々増やしていくのが学問であると…。それをやるのが“歴史学の使命である”と思っています。

従って、六ヶ所村と“尾駮の牧”の関係は、結論から言えば「わからない…。わからないとは“そうではない”という意味ではない。ゼロでもなければ100でもない。ゼロと100の間にある。50%を境にしてどちらに振るかは問題がありますが、100ではないが、ゼロでもない」ということ。“ゼロでもない”ということで、夢は繋いでおいて頂きたいと思います。

これで話しは5分位で終わってしまう訳ですが、せっかくですから、「平安貴族の世界」とか「古記録の世界」について、少しお話ししたいと思います。尚、資料は12ページあります。12ページ目を終わるとここだけちょっと紙が小さいんですが、『御堂関白記』の一番有名なところを、裏と表をコピーしてプリントにして持って参りました。二つに折っていただいていますので、現物の裏表です。尚、複製もそこに一本持って参りました。あれは“寛弘八年”と言って、一条天皇が亡くなった年の自筆本の複製です。丁度、裏書があるところを開いていますので、休み時間にでもご覧ください。

相内さんの会に過大な負担をさせてはいけないと思って、カラーコピーを日文研のコピー機を使ってコピーして送ったのですが、六ヶ所村に入ってみると、どうもお金がいっぱいありそうな感じがしますので、ちょっと反省しておりますが、日文研のコピーですが、皆さんの税金でやっていますのでご安心下さい。(会場、失笑)

## 2. 「尾駮」について

「尾駮」について私も予習がてら調べてきました。1ページ辺りをご覧ください。“ジャパンナレッジ”というパソコンのインターネットで引ける辞書があります。パソコンだけでなく、アイパッドとか 아이폰でも出来ます。『日本国語大辞典』とか『国史大辞典』とか『古事類苑』

とか『日本歴史地名大典』などが電車の中でも携帯で引けます。

世間では皆さんのお住まいのところは、一般的には「青森県、下北半島太平洋岸にある六ヶ所村の中心集落。尾駮沼があり、周辺の台地は古くから馬の産地」と言われています。

よろしいですか。異議があればジャパンナレッジに言います。その例として、『後撰集』の歌が2つ引いてあります。なお、ジャパンナレッジでは両方とも“読み人知らず”としていますが、当然最初の歌は『後拾遺集』に出てくる「相模」という人の歌です。2つ目の歌は「源(みなもと)」の何と読むのでしょうか…? 「善」という字が当てられている朝臣の歌。あるいは、『蜻蛉日記』や『奥の細道』に出てくるといことです。これが、“尾駮”の説明です。

次に、「尾駮沼」については、「通称尾駮集落の南から西に広がる堰止湖沼群の一つ。鷹架(たかほこ)沼の北方にあたる。面積3.6平方キロ、周囲12.5キロ。」と書いてあります。よろしいでしょうか…。最後の方に「尾駮の牧」という紀行文があって、菅江真澄が“「尾駮の牧」はここである”というふうに言ったと書いている。

2ページ目ですが、「尾駮村」という項目を立てています。『日本歴史地名大典』は、これは立派なシリーズでして、歴史上出てくる殆ど全部の地名を項目に立てています。

“尾駮村”は、「下北半島基部東岸にある尾駮沼の北に位置する。北は出戸村、南は鷹架村、西は有戸村(現野辺地町)に接し、北部を老部川が東流する。地名の初見は天暦五年の『後撰集』にみえる「をぶち」が当地に比定されるとすれば最も古い。」とある。「比定されるとすれば」というのがポイントで、確定している訳ではないということです。その後、『蜻蛉日記』や『後拾遺集』で「尾駮の駒」が引用されております。

3ページ目ですが、これまでは『日本歴史地名大典』の「青森県の地名」という本を引いてきたものです。これだけみると、“「尾駮の牧」は六ヶ所村である”ということをおお体認してもらっていると思いがちなのですが、実は「青森県の地名」という本では、「尾駮の牧」という項目を立てておりません。「尾駮の牧」で検索すると、3ページ目の「宮城県の地名」というところに出てくる。これは非常にアンフェアであると思います。2つの説があるときは、両方に載せるのが原則で、一方だけ、宮城県の方だけを記載するのは非常に良くないと思います。

因みに、宮城県の方は歌枕としての初出は『後撰集』にあるとし、次は『奥の細道』「曾良旅日記」なんかが出ていまして、石巻市を「尾駮の牧」ということに比定しております。

ということで、両説あるのです。お前はどちらと思うのだと言われても非常に答えにくいところではありますが、「尾駮の牧」は“六ヶ所村の尾駮”と“宮城県石巻市”の2つのどちらかで、いずれにしてもわからない。この2つのうちのどちらかになるのではないかと思うが、わからないということです。

### 3. 『御堂関白記』と「世界記憶遺産」

せっかくですから、『御堂関白記』の話しをしたいと思います。ユネスコには3大遺産というものがあるって、“文化遺産”と“自然遺産”と“記憶遺産”の3つであります。

“文化遺産”というのは、日本で初めてなったのは確か法隆寺と思いますが、あとは京都の寺

社群とか「日光」、「石見银山」、「鎌倉」が落ちたとか、「平泉」が登録されたとかがある。「自然遺産」は秋田県と青森県にまたがる「白神」、「知床半島」とか「屋久島」とかがある。

そして“記憶遺産”であります。何故かという、日本に“記憶遺産”が一つもなかったからであります。何故日本になかったかというと、文化庁の言葉を代弁しますと、あまりにも対象となるものが多くて、どれを推薦して良いかわからず推薦出来なかったと…。だからこれまで推薦しなかったということらしいです。

2009年に今度2つ推薦するので、「お前はその推薦委員をやりなさい」ということで、推薦に関わって来ました。因みに、最初の2つは『御堂関白記』と『正倉院文書』でしたが、ご存じのように『正倉院文書』は文化財ではなくて、御物(ぎょぶつ)であって、天皇が持ち主であり、仮に記憶遺産に登録されても自由に閲覧できない、研究者でも見られないということがありますが、登録されれば公開しなければならないということで、宮内庁が渋りまして、『御堂関白記』と『支倉常長遣欧使節関係資料』ということで推薦しようということに決まって書類を書き始めました。

ところが、書き始めた頃に、いきなり“山本作米衛の九州筑豊炭鉱画”が登録されましたというニュースが入ってきて、皆びっくりしたわけです。ただ、“記憶遺産”だけは誰でも勝手に申請できる。自治体とか、大学とか、多分個人でも申請できると思います。「九州筑豊炭鉱図」は立派なものではあるけれども、『御堂関白記』と並ぶようなものではないと思いますので、皆がっかりしました。

今年の6月19日に『御堂関白記』と『支倉常長遣欧使節関係資料』が登録されましたが、『支倉常長遣欧記』はスペインと日本政府の共同推薦でありますので、今、記憶遺産は日本に3つありますが、『御堂関白記』だけが日本政府が単独で推薦したものの第1号であります。「山本作米衛の九州筑豊炭鉱図」は筑豊の人たちが推薦したものです。

尚、現在、『東寺百五文書』が次のものとして推薦されています。

『御堂関白記』は大学に入った年からやっていますので、もう30年以上関わっています。次にご登場頂く飯沼先生のご指導も仰ぎながらずっと読んできた次第です。注釈を一緒に作ったり、最近では現代語訳などをつくったりしています。

#### 4. 『御堂関白記』と「競馬(くらべうま)」

“競馬(くらべうま)”の話しをちょっとしましょう。「くらべうま」は「競馬(けいば)」という字を書きますので、今の競馬(けいば)のようなイメージがあると思います。今の競馬はスタート地点があって、10頭前後が一斉にスタートして、ぐるっと何周かしてゴールがあって、そこにどちらが先に着きますかというのを競う競技だと認識しています。時々1着でゴールしても失格となる馬があります。隣の馬の前を横切ったとか斜めに走ったとって着外となるケースがありますが、相手の邪魔をしてはならないということで、非常にフェアな競争です。

ところが、昔の「競馬」はそうではなくて、2頭左右で走ります。もう一つは、早く着くのが目的ではなくて、相手の邪魔をしながら乗りこなす。或いは、変わった乗り方をしてその美

しさを競う。一応先着順なんですが、その後判定が行われる。最初に着くのは有利なのですが、“乗り方がきたない”とか“優雅じゃない”とか“騎手がぶさいくんだり”とかいうことで変わったりする。それ以上に、日本文化の本質に関わるんでありますが、左と右に分かれて勝負をすると、最終的には“必ず左方が勝つ”ということになっている。相撲でも弓でも何でもそうです。『源氏物語』で矢合わせがあった。光源氏が左方にいて、最終的に左方が勝ちます。藤壺が出て来て左方の勝ちと判定する。まあ、“いかさま勝負”になるわけです。今の相撲は、“土俵を出る”とか“手をつく”とかで負けとなりますが、昔の相撲というのは総合格闘技で、投げる、締める、撲る、相手を持ち上げて木の幹に押し付けて相手の背骨を折っていても、それでも判定はそれからやる。何故かと言うと、“左方が天皇方”であります。「昔から左方を勝ちにして、その時点で終わる」。右が勝ったり左が勝ったりするが、通算で左が多く勝っていると、“今年はその辺でやめよう”ということで“左方を勝ちにして終わる”。競馬もそうなんだろうと思います。

今の相撲で、八百長の問題があったとき、よっぽど新聞に投書しようと思って、八百長など問題にならないと、“左側が勝つように決まっているんだから何も問題はないんだ”と投書しようと思ったんですけど、ひんしゅくを買えばダメなので止めとききました。

(絵を説明しながら)これが馬場で、これから始まるところで、ここに“馬場殿”というのがあって、ここで貴族が酒を飲みながら見ている。現在、京都の賀茂神社で競馬がありますが、どちらが早く着くかを競っている。今は危なくて、相手の邪魔をしたりするとケガ人がいっぱい出るので今はできない。これは年中絵巻図という資料であります。“隨身(ずいじん)”と書いて、摂政・関白の護衛をする官人ですが、馬をうまく乗りこなせないといけない。この人は「秦久則(はたのひさのり)」だと思いますが、馬が一本足で立っていて、後ろ足一本で立っている。それでも、彼は見事に垂直姿勢を保っている。かなりすごい乗り手なんだなと思います。これをやりながらゴールに向かって行くのが“競馬(くらべうま)”だったようです。この人なんかは逆に跳ねてつんのめっている。前足2本だけで立っている。見事に体重移動している。こういうのをやり合うのが多分“競馬”なんだろうと思いますが、現在は見ることはできません。危なくてやる人は今はいません。相撲も「撲る」「蹴る」「締める」というもので、もし今もやっていたら見に行きたいという感じがしますが、それもやる人はいません。

## 5. 『御堂関白記』と「道長」

それでは簡単に『御堂関白記』の話をしてします。3ページ目の後半あたりからです。(絵を見ながら)この人が、藤原道長さんを描いた一番古い絵です。太っているように見えるかもしれませんが、衣装がだらっと膨らんで見えますので、太って見えます。前近代の国は、太っている方が美しいという認識があるようです。今でも某国ではそうです。貧しい国と言うのは、太っている方が素敵なんだというイメージがあり、一杯食べられる身分である。従って、教養もあるし、地位も高いという意味だろうと思います。『大鏡』とかを見ると、「いみじゅう美しゅう肥え太らせ給いたり」とあります。

当時は、栄養のバランスがすごく悪くて、大量のでんぷんを摂取して大量の米飯と大量のどぶ

ろくを飲みますので当然太る。殆どの人が糖尿病に罹かるということです。絵巻は鎌倉時代のもので、本当にこんな顔かはわかりませんが、見ているとなんか道長さんはこんな顔だったのかと思ったりします。

これが道長さんの家の一つ。日常的に住んでいた家。「土御門第（つちみかどてい）」というところの故地、元、あった場所です。道長さんは10個以上邸宅を持っていましたが、日常的に住んでいたのはここです。これは現在の京都御苑の中にある仙洞御所の北側とその北側につくった迎賓館の南側が大体「土御門第」の跡であります。仙洞御所に池が2つあって、そのうち北池が「土御門第」の池と大体重なる。多分、池自体は道長さんの時代からあったと思います。仙洞御所はすごくいいところですので、京都に来たときは是非いらして下さい。「土御門第」の池といいますと、紫式部日記なんかはこの池の有様から記述が始まりますので、ここに来ると“紫式部日記の世界”に浸れます。

これが京都市が作りしました“平安京の模型”の中の、この部分が道長さんの土御門第です。東西が120m。南北は2町で240mではないのですよ。道を屋敷の中に取り込みますので、道幅が大体20mありますので、南北が260m。最初はこちら側の1町、正方形の部分しかありませんでした。政権を取ると家の中に馬場を作りたいと思い、こっちに拡張して、“競馬”のために彼は屋敷を倍の広さにした。現在、京都御所の東側あたりに位置します。因みに、これが道長さんが作りしました「法成寺」というお寺。これが鴨川。これ全部が「法成寺」の敷地。これは2町四方260m四方位の大きな寺です。ここが「阿弥陀堂」といいまして、ここに九体の阿弥陀如来を安置しました。“丈六”ですから、「平等院」の阿弥陀如来と同じ大きさのものを九体作りしました。なぜならば、極楽は九種類あると言われていています。上上から下下までである。九種類つくっておいて、九体の仏さんから五色の糸を持って来て、全部で45本を握りながら死んでいくと、ピッと重ってそこに電流が通ると思ったのでしょうかね。

因みに、『栄花物語』という書物を見ますと、道長は下下、一番下に生まれ変わったと娘が夢を見たと書いてあります。「阿弥陀堂」のことを“御堂”といい、このことから、彼のことを“御堂関白”と呼ぶ訳です。

3ページ目から4ページ目にかけて書いてありますが、道長は、平安時代中期の政権を担当しました。4ページ目に系図が書かれていますが、詳しくは読んでいただければ分かるんですが、彼は恐らく日本の歴史の中で一番権力が強かったと思います。当時、娘と天皇を結婚させて、皇子（おうじ）を生ませる。そして、その皇子が天皇に即位する。というのが一番権力につながる。

自分のお姉さんが生んだ「一条天皇」に自分の娘を后にして、そこから2人の皇子が生まれて2人とも天皇になっていく。しかも、それのみならず2人の天皇の後に自分の娘を入れている。「後一条天皇」と「後朱雀（ごすざく）天皇」の後は「彰子（しょうし）」の妹達であります。彼は未来永劫（みらいえいごう）、生きていれば権力が保証されていた。これは日本史上最高の権力です。しかも、後一条天皇が即位した段階で、まだ彼は生きていた。孫が天皇になっていて、尚且つ娘の彰子が生きていて、これが摂関政治で一番大事なんです。母が生きているというこ

と。この例はほとんどない。しかもラッキーなことに天皇のお父さんが死んでいない。一条天皇のことですが、父親がいない。父親が活着しているとちょっかいを出す。日本史上、このような権力を持った人は殆どありません。「円融天皇」が死んでから、一条天皇の母の「詮子（せんし）」が権力を握る訳です。孫が天皇で、父親が死んでいて、母親が活着していること、これが一番強い“身内的結合”ということで、彼は一番強い権力を握っていた。

それのみならず、道長は経済的にも当時の日本のGDPのかなりの部分を集中させていたと思っています。秀吉とか清盛とか信長とかは結構富を集積させていましたが、それでも秀吉には家康と言うライバルがいた。清盛はただの太政大臣に過ぎなかった。道長の場合には対抗するような経済力を持っている人がいない。かなりの部分の富が集中していたと思います。経済的に恐るべき実力を集中していたんだらうと思います。

もう一つは、文化の中心でもあったということ。彼は漢詩をつくるのが大好きで漢詩をつくる会をやたら頻繁に開いています。また、それをプロデュースしています。娘の彰子さんのところに女御をいっぱい呼び寄せまして、「紫式部」とか「泉式部」とかを呼んで『源氏物語』とかを始めとする文学をつくらせた。道長が居なかったら、多分『源氏物語』は完成していなかったと思います。

尚、ふと思い出してしまったのですが、ユネスコの書類をつくる時、ユネスコは殆どがヨーロッパ人でパリが本部ですが、彼らにとって日本なんかどうでもいい国。そんな国が昔からあったのという感じ。江戸時代から後は大体知っているでしょうけど、千年前にすでに立派な国があったということが殆ど知らない。知っていても価値を認めない。「世界史」の中で「日本史」の扱いはものすごく低い、“辺境史”の一つであります。私は「日本の天皇制」の研究もテーマの一つですが、扱いはものすごく低いです。4年に一度「世界歴史会議」が開かれるのですが、中国の皇帝の論文とかローマ帝国の皇帝の論文は一つの部屋を貰える。日本の天皇の論文を書いても、その他の王家ということで、“辺境史”の一つの扱いです。

そういう人達に『御堂関白記』の素晴らしさを分からせるために、ユネスコに推薦書を書くときは、いろんな理由をつけて、例えば“災害の記録がいっぱい残っている”とか、“天皇の記録がいっぱいある”とか、“古い暦がよくわかる”とか、一番傑作だったのは“『源氏物語』のパトロン日記である”ということが一番最後に付け加えました。そうでもしないとわかってもらえないという苦しい推薦でした。道長がおそらく紫式部に紙を大量に与えて書かせたんだらうと思います。

それから、“宗教の中心である”ということ。政治、経済、文化、そして宗教の中心。道長が始めた宗教儀式がやたらと多いんです。それはずう〜と後まで続きます。従って、最近では道長は古代の権力者ではなく、“中世のもう一人の王”、“中世の始まりの王”と見る人が多いです。道長がやってきたことを藤原氏ではなく、天皇家の人達がやったのは院政であると見做す人が多いです。という実は画期的な人物なんですね。

## 6. 『御堂関白記』とは何か

『御堂関白記』はもともと36巻“自筆本”があったが、大半が失われました。事情を言いますと、鎌倉初期に藤原氏が2つに分かれるとき、半々に分けたと言われている。九条家は3家に分かれるが、この18巻は全部焼けてしまった。近衛家からのちに鷹司家が分かれたとき、もしかしたら18巻のうち4巻を与えたが、これも焼失したと思われる。おそらく応仁の乱の可能性が一番高いが、江戸時代の自筆本を写したのものがあるから、もしかしたら「禁門の変」かあるいは「蛤御門の変」かも知れません。今、14巻しか残っていない。

現在、京都の「陽明文庫」というところに『御堂関白記』は所蔵されています。蔵が二つ建っている。場所ですと、仁和寺の隣り、西側。京都の北西の山あいに入ったところです。普通見学に行くところの2階に通されるのですが、実は『御堂関白記』を始め文化財はこっちの蔵にある。より厳重になっていて、殆ど人を入れない。中はこういう感じ。三重位の扉があって、ものすごく強力な殺虫剤、防虫剤が立ち込めて目が痛くなる位である。『御堂関白記』は入ってすぐ手前の左側の箱においている。非常に軽い机の箱に入っている。なぜかというとなんかすぐ持ち出せるようになっている。火事になったら、すぐ持ち出せるようになっている。他の国宝は焼いても『御堂関白記』は持って行く。管理人に言わせると“重文はいっぱいあるからもう十分だ”（笑）。国宝がいっぱいあるからということだそうです。他の国宝を焼いても『御堂関白記』だけは持って行く。

これが自筆本の全部。そこに複製があるので、後でご覧下さい。暦、『具注歴』と言いまして、今でも日めくりの暦を使っている方もいるかもしれませんが、暦の空白が2行分空いている。これを間明き（まあき）と言います。道長さんは紙を持って行って、道長さんはすごく紙にこだわる人で、特注して2行空のものを作ってもらったと推測されています。時々、裏に書いてある。従来、“表に書ききれなかったのを裏に書いた”と言われていましたが、私はそれは間違いで、そうではなく、“裏に書く必要があったから裏に書いた”という論文を今、書いています。

これが皆さんにコピーして配った自筆本。平安時代の後期に孫の「師実（もろざね）」さんという人が古写本をつくりました。これも国宝で、こちらにも記憶遺産と一緒にしてもらいました。これは、“豫楽院本（よらくいんぼん）”と言いまして、江戸時代に有名な近衛家熙（このえいえひろ）さんという人が古写本を正確に写しとったものです。自筆本の写本は殆どない。一つだけ例外がありますが。古写本は写したものが時々あります。俗に“寛弘元年”と言われていますが、実は“長保六年”で、年の途中で改元するので、“長保六年”が正解です。

めくって頂くと表は5日という日付があって暦が書いてあります。6日という日付があって暦を書いています。6日は病気を治療するのとお祓いをするのと垣根を壊すのと家を壊すのにいい日であるとなっている。7日は頭をそるのと、坊さんでしょうね…。垣根を壊すのと家を壊すのと喪服を脱ぐのと葬式と草を刈るのに“良し”となっている。「治療によし」などと言うと治療によくないという日は治療をしなかったのかな？と思ってしまうのですが、多分正確に守っていな

いと思います。

5日分が書ききれなくて、裏に書いた。裏に書いたのはこれが初めてです。

これが裏です。「次」と言う字から5日の裏書が始まっています。5日分が書ききれず初めて裏に書いています。5日の裏書です。6日はこんだけしか書いてなくて、こんなに空白があるので空白に書けばよいのに、ここ（裏）に書いてある。一日のスペースは合計3行しかありませんから、スペースはこんだけしかない。裏に書いてある。これは裏に書きたかったのがよくわかる。歌だけを裏に書きたかったということがこれで分かる。

これが一条天皇が亡くなったときの自筆本。これはその一条天皇の辞世の句。「いみじく崩じ給う」の崩の字が、「崩じて」の「崩」が「萌える」になっていて、せっかく天皇が死んだのに、こんな間違いはしてはいけないのですが、間違っている。

これの複製がそこ（会場）にあるので、後で見て下さい。

尚、色んな事がわかりまして、一つだけ面白い例を出してみると、長保二年は、西暦に直すとちょうど千年です。その正月の10日の条です。彼は日記を書き始めてここまで書いて、ここからこのままではまずいということで、墨を磨りなおして一所懸命消しました。彼は自分で書いたものを消したのはここだけです。よほど、まずい事を書いてしまった…。彼は自分がわかればよいという人で、字を間違えたときはその字の上に書くという人です。消し方がいいかげんで筆が薄くなっている。消し忘れがあったり、ちょっとずれていることがある。下から光を当てる装置がありまして、下から光を当てると読めるところがある。

先々週、光をあてたらどうかと助手に言われたものですから、（スクリーンを見ながら）拡大してみます。見えますかな？ これで一文字です。ここに偏の左側が見えてます。こちらにつくりの右側が見えてます。こんだけしかないということは、「日」に「青」と書いて“晴れる”という字。因みに、こっちはよく見ると「月」と書いている。普通に考えると「明」という文字になる。「晴」と「明」で、映画とかによく出てくる通称“晴明（せいめい）”と読める。

私は「晴明（はるあきら）」と呼んでいます、つまり、占いをする人。よく見ると、娘の彰子を后にする日、その日は何月何日が良いかについて晴明を呼んで占えと言って、その結果が出た。「廿」という日付まで書いてある。「二十何日が良いですよ」とまで決まっていた、それからあわてて消している。墨の濃さが異なるので、多分墨を磨って濃くして、それで消している。よほど何かあったと思う。現物を見るとこんなことが分かってきて、おもしろいものです。

『御堂関白記』はおもしろいものですが、非常に読むのが難しく、なかなか世の中に分かってもらえない。ということで、4年前に「現代語訳」を出版してもらいました。文庫本ですが…。せっかく文庫本を出したのに、もっと皆いろんなことに、小説や物語のネタにして書いてくれば良いと思っていたのですが、誰もやってくれないので、今年、自分で新書を二冊出しました。

## 7. 『御堂関白記』と「陸奥」と「競馬」

さて、それでは次に『御堂関白記』を使いまして、「陸奥」がどういうふうにかかれていたのかというのを見て行きたいと思います。

4 ページ目から始まる部分でして、現代語訳とともに、データベースも作っておりまして、職場のホームページから検索できます。「読み下し文」は私の職場のホームページに登録さえすれば誰でも無料でダウンロード出来ます。研究者でなくても結構です。最初に登録の申請だけしてIDとパスワードを取得すれば、必ずアクセスできます。

「陸奥」で検索したら、全部で24個出て来ました。「陸奥」という字と「馬」という字は太字にしました。ほとんどの場合、「陸奥」は「馬」と一緒に出てくる。1番は長保元年で、そこから始まって馬の話が出てくる。おもしろいのは、12番、6枚目ですが、陸奥紙(みちのくがみ)を、みちのくから入ってきた立派な紙を、皆にあげたとあります。

後、面白いのは11番ですが、陸奥から都に馬がやたらやってくるのは分かるのですが、道長は殆どの馬を人にあげているんです。人にあげるために馬をもって来させる。私物化していない。11番はこれから陸奥に行きます陸奥守に馬を下賜した。その奥さんにも女性用の馬をあげた。突然やってきた人にも馬をあげている。馬の本場の陸奥へ行くのに馬をあげる必要がないのにあげている。道長の馬に乗って多賀城まで行く。道長さんから貰った馬に乗っていくと、多分羽振りが良かったらうと思います。

もう一つは7枚目ですが、“競馬”で検索すれば、『御堂関白記』だけでなく「藤原行成」の『権記』も一緒に検索しました。この時代は、『御堂関白記』と藤原行成の『権記』と「藤原実資」の『小右記』という三つの立派な日記が残っていて、同じ出来事を三人が三者三様に日記を書く、感想も違う。読み比べると非常におもしろい。

それで検索すると、道長はやたら“競馬”をやっています。私が一番好きなのは、2番の資料でして、7枚目の一番最後ですが、長保元年2月20日、諸社に祈念穀奉幣使の発遣を行うことになっていたが、その儀式は必ず「大極殿(だいごくでん)」の前でやるのですが、大極殿まではちょっと距離があり、なぜか道長さんはそこに行きたがらないということが多いです。

「夢想」が宜しくなかったので参入しなかった。“夢見が悪かった”ので行かなかった。「この日、土御門第の新しい馬場に、初めて馬を馳せた。公卿たちが多く来た。これは春日祭の競馬に参るからである」とある。面倒くさい仕事は、“夢見が悪い”と行っていかない。やりたいことはそれでもやる。政権を取ったときに初めて春日大社に参るときに馬をいっぱい連れて行って、その馬を自分の馬場で走らせて“競馬”をやっている。そのための“競馬”を自分の家でやっていた。非常に馬にこだわる人で、一から十まで序列をつける。どれとどれを組み合わせると面白くすると面白いということを知っている。

さらに驚くべきことに、道長さんは馬の顔が分かる。それのみならず、これは何年か前に自分があげた馬だということまでわかる。何年後に見てもわかる。いかに道長が馬が好きだかが分かる。それほど競馬が好きだったかという記事でありまして、だんだん彼の記述も長くなっていきます。

10ページ目と11ページ目を見て頂くと、“競馬”の次第を書いた記事が、24番とか25番とか27番がそれに当たります。『御堂関白記』は記述が非常に短い。何故短いかというと、『権記』と『小右記』はメモをとってそれを元に翌朝日記を書くが、道長さんは記憶だけで書いてい

た。従って、思い出した順番に書くので、非常に短く平均すると大体40字位。ところが、時よりめちゃくちゃ長い記事がありまして、一番長いものはこの間数えたら1,869文字。かなり長い記事です。

24番、25番、27番、28番の記述は長く、道長はもしかしたら“競馬”に関してはメモをとっていたのかもしれない。28番なんかは「勝敗表」を書いている。誰が勝ったとか…。おそらく「取組表」みたいなものがあったのかもしれない。それに自分が書き込んで、それを元に翌日『御堂関白記』を書いた。それほど馬が好きだったということになると思います。“競馬”のことがよく分かるので、後で読んでいただければと思います。

特に24番、25番、27番を読むと当時競馬をどうやっていたか分かります。

尚、『小右記』にも道長のおもしろい記事があり、ある人が馬から落ちちゃった。みんなが助けようとしたら、道長が怒って「そんな奴は助けるな」と言って帰らせたとある。それくらい感情の起伏が激しい。道長の前で“競馬”をするのはすごく大変だった。成功したらご褒美をいっぱいあげるが、失敗したときはきつく怒鳴られるというプレッシャーがあったと思われます。

## 8. 道長と馬 一牛馬の流通センター

最後になりますが、12ページ目当たりですが、ご覧下さい。

これだけは強調しておきたいのですが、「道長と馬」という部分です。従来、道長は悪い奴だというイメージが定着していました。これはいろんな理由があるんですが、明治になって東京に都が移って、東京に帝国大学・国史学校が出来て、天皇が東京に移る。江戸に幕府が出来た。その時から京都は悪い町だ、江戸・東京はいい町だ。貴族は悪い人だ。武士はいい人達だというイメージが出来上がって、貴族の代表である“道長は悪い奴”だ。近代の歴史学は、摂関政治というのは天皇をないがしろにした悪い時代、政治を壟断(ろうだん)した悪い連中だという認識がある…。道長なんか悪者の代表だというイメージが出来上がってしまった。道長が馬を集めるのは“賄賂(わいろ)”だと言われてきました。

一番熱心に言ったのは村井康彦という人でして、実は私の職場の先輩なんですが、これは大間違いであります。調べますと、道長は馬を貰っても、ほぼそれを人にあげている。道長は私腹を肥やすということはしていない。貰ったら人にあげる、すぐ人にあげる。どの儀式に何月何日まで何頭必要か?ということを知っていて、賄賂ではなくそれを人にあげている。いわば、“流通センター”というようなもの…。朝廷が持っている牧がなかなかうまくいかなかった。“期日が遅れる”“頭数が足りない”、中にはごまかして“途中で死んでしまった”と言ってごまかす人が出てくる。予定どおり朝廷に馬が揃わない…。ところが、道長のところへには持って来る。頭数が足りないときは道長が工面した。馬だけでなく、他のもの、布や絹にも適用できると思う。

朝廷からの給料がだんだん滞ってくるが、それが道長のところへ行くと帰りに一杯貰える。それが給料代わりになる…。大きな収入になる。彼は経済を殆ど動かしている。他に大臣が4人いるが、殆どそういう仕事はしていません。経済を動かしているのは、道長だけ…。彼こそ国の中心を担っていたということが分かる。

もし興味がおありになったら、「参考文献」を最後に付けてありますが、『御堂関白記』の現代語訳とか面白いところだけをピックアップした本とか、「『御堂関白記』はこう読むんだ」、「『御堂関白記』はこう書いたんだ、こう消したんだ、こう直したんだ」ということが分かる。このページを切り取って本屋さんに行けば、たちどころにすぐ出てくると思いますので、よろしく願います。我々、人文系の学者は大変な立場にいるわけですが、関心を持って頂ければと思います。

## 9. 最後に…

また、相内さんがやられているこの会は非常に有意義なものです。東京都と京都以外の場所でこういう催しとか会が開催されるということは、すごく立派なことだと思います。全市町村でこのようなフォーラムがあれば良いのと思いますが、とりあえず六ヶ所村からこれが始まったということですので、未永く、暖かく、見に来てください。或いは、村の方はお金を出して下さい。ということをご期待したいと思います。これで、私のお話しを終わらせていただきます。本日は、有難うございました。